

地域一体化するイタリア有機農業(上)

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄—

◇有機先進国イタリア

イタリアは、農地面積に占める有機栽培比率が14.5%（2016年）と、有機農業の先進国であり、食については言うまでもないが、有機農業の動向にも世界が注目しているという過言ではない。ちなみに日本の有機栽培比率はわずか0.2%（有機JASのみ）だ。

イタリアの有機生産は依然として増加傾向にはあるが、次第に市場の成熟化が進んでいるようにも感じている。すなわち有機農業への取り組みそのものが単に増加するというにとどまらず、有機による生産規模の拡大と大量生産にともなって大型販売店による取り扱いの増加、加工品化やファッション化が進行する一方で、小規模家族農業を中心に地域全体で環境保全や文化の振興に取り組む中に有機農業を位置づけ、有機農業の着実な進展をはかる動きが顕在化するなど、有機農業への取り組みは分化・多様化しつつある。

この小規模家族農業を中心にした環境保全や文化の振興と一体となった地域をあげての有機農業への取り組みは、「有機の町」や「有機地区」という運動として展開されている。その取り組み内容や実情をさぐるため、今年8月下旬にイタリアの現場を歩いてきた。そこで2回に分けて、これらの運動の概要とその取り組み内容について報告したい。



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。

1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表。

〔主な著書〕

「地域からの農業復興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）「農的社会をひらく」（創森社）など



世界遺産のネイヴェの風景

◇ブドウ畑の眺めが絶景のネイヴェ

ミラノから入って最初に訪れたのが、イタリアの北西部にあって、フランスと国境を接するピエモンテ州にあるネイヴェというコムーネ（自治体）である。ミラノから西に、車で2時間強走ったところであり、「スローフード」の国際本部があるブラの少し手前で、ワインで有名なバローロやバルバレスコにもすぐ近い。

ネイヴェは人口3400人ほどのコムーネであるが、その主たる産業はブドウ栽培とワインの生産で、「バルバレスコ」を表示できる四つあるコムーネの一つであり、その中では

最も生産量が多い。この一帯は写真のように、なだらかな起伏が続く中にブドウ畑が広がる素晴らしい景観を呈しており、14年には世界遺産に登録されている。この地域の主たるブドウ生産農家は小規模の家族農業経営であるが、この小規模家族農業経営によるきめ細かな管理が当地の素晴らしい景観を生み出し維持してきた大きな要因となっている。

◇有機農業への取り組み

バルバレスコは高級ワインとして世界的に有名であるが、昔から高級品扱いをされていたわけではないという。

農家が生産したワインは仲買人を通じて販売するのが一般的であったものを、ガヤというワイン生産農家が1960年代に米国に渡り、そこで直接販促活動を展開することによって評価を獲得したのがそもそも、これを機に品質に自信を深めると同時にいっそうの品質向上と増産に努めるようになったそうだ。



ホテルの食堂の壁に並ぶバルバレスコワイン

こうして生産量の増加とともに農薬や化学肥料の使用も増加してきたが、次第に水が汚染されるようになり、飲み水としての利用が困難となった。こうして農薬や化学肥料による汚染について認識するようになり、有機農業に目が向けられることになる。確かに有機農業への取り組みは手間やコストがかかるものではあったが、次第に有機農業による自然回帰の姿勢が付加価値を生み出し経済的なメリットをもたらすこともわかってきたという。

わずか10年前にはネイヴェで有機農業に取り組んでいたのは1軒にすぎなかったが、近年、急速な広がりを見せ、2016年には耕地面積の14.5%が有機で栽培されるようになり、現在では有機への転換期間中の耕地も含めると30%を超えているそうだ。直近での増加は「有機の町」への取り組みが大きく影響しているが、以前はホビー農業と見られがちであった有機農業に、信念をもって取り組み、有機農業の必要性・重要性を主張し実践してきたマリナ・マルカリーノ氏が大きな役割を果たしてきたようだ。

◇有機の町

「有機の町」運動は、①質の高い食べ物を生産する②環境を大事にする③地域文化を守る、の三つの柱を推進していくための、自治体の首長が集まっての協議体で、03年にスタートさせたものである。現在、400の自治体が加入しており、コムネだけでなく、県や州、中にはローマやミラノのような大都市も加入しているという。加入の要件は自治体の首長が、有機農業をてこにしてどのような町づくりをしていくのかという取り組み目標を明記した書簡を提出するだけの、きわめてゆるい運動である。海外の自治体も加入可能ということで、対応してくれたアントニオ・フェレンティーノ代表の話では、既に海外の自治体も加入しており、日本の自治体の加入も強く希望しているとのことであった。

ネイヴェでは、その景観が世界遺産に登録されたのが「有機の町」に取り組むきっかけになったそうだ。この景観を維持していくために有機農業への取り組みを加速させていくと同時に、学校給食での地元産の有機食材の使用、さらにはごみを分別しての収集徹底をはかるなど有機、エコロジーを前面に出した町づくりを展開しつつある。質の高い食べ物・景観・環境・文化を味わってもらい、観光客を増やしていくところに最大のねらいがあるようだ。

◇自然農法による植物ストレス解放

訪問した有機農家の一つがマリナ・マルカリーノ氏で、4代にわたる農家で、17ヘクタールの農地を所有、このうち14ヘクタールをブドウ畑にし、ワインを製造・販売している。

大学生の時代に農薬の持つ毒性に抵抗感を抱くようになり、先生と一緒に有機農業への具体的取り組みを研究し、1982年から有機農業を開始したそうで、日本の自然農法家・福岡正信の著書「わら一本の革命」には大きな影響を受けたという。

アニマルウェルフェア（動物福祉）があるなら植物もストレスから解放してやるべき、いい畑をつくることは芸術だなど、印象深い話も多く、強い誇りがあることを感じさせられた。



自然農法を取り入れたマリナさんの有機農場